

豹^ひ変^{ょう}御^{へん}曹^{おん}司^{ぞう}のキスは突然^しに

目次

第一章	偽 ^{いつわ} りの体は二つのキスで暴 ^{あば} かれる	4
第二章	傲慢 ^{ごうまん} 部下の仮面の下にあるものは	91
第三章	素肌に残された嫉妬 ^{きずあと} の傷痕	186
第四章	繋がった運命のメロデー	235

第一章 偽りの体は二つのキスで暴かれる

「美しい容姿に美しい名前。その上、仕事はできて会社仲間にも慕われる。まったく花園は完璧な女だな」

あれは入社三年目の夏。ビールで少し饒舌になった「彼」は、そう言って私を誉めた。それ以来、彼の「完璧」でいたくて、私は背伸びし続けている。

ただどつま先が痺れるほど背伸びをしても、どんなに「完璧」な女性を装ってみても、心のどこかでは分かっていた。

偽物の自分では、満たされることなんてないってことを。



社員食堂に向かう足を止めたのは、窓の向こうに秋空を見たから。

澄んだ青に、白砂を撒いたような雲。その様は仕事で煮詰まった脳を心地よく癒す。

スマホで時間を確認し、午後の予定を思い返す。営業に出るのは午後二時だから、時間には余裕

がある。昼休みぐらい外の空気を吸おうと私は会社のエントランスに向かって歩き出した。

『株式会社ソーシオン』本社ビルから外に出ると、昼食時のオフィス街は制服に身を包んだOLで賑わっている。

株式会社ソーシオンは、化粧品製造販売を行う、国内でも有数の大企業だ。その業務内容ゆえに、女性社員は全体の約六十パーセント以上。「美」を商売にしている以上、会社は社員に対し、ファッションをはじめトータルでの美意識の高さを求めている。働く者達もその姿勢に共感し、ほとんどが一定レベルの美意識を保持していた。

華美にならず、上品で清潔感のあるスタイル。総合職が勤務時に着用するスーツも、それをベースにすることが暗黙の了解となっている。当然、入社六年目の私、花園空美のクロゼットも、すっかりその手の服で埋まっていた。

まだ暑さの残る空気の中、時々利用する蕎麦屋さんに向かうため、私はヒールでアスファルトを蹴り早足で進む。冷房の効いた室内から眺める分にはよかったが、実際歩き出してみると九月の空気がまだ暑さに蒸れている。

そんな中で思い浮かぶものと言ったら、もうざる蕎麦しかなかった。

蕎麦屋さんに到着すると、予想通りそこには小さな行列ができていた。信州蕎麦が美味しいこのお店は、昼食時にはいつも込み合う。だけどその列に、児島課長率いる営業二課の面子三人が並んでいたのは予想外だった。

「花園主任！ 社食だと思っていました」

営業二課の若手、入社一年目のネモモが私を見つけて元気に手を振ってきた。
ネモモこと米田桃子は、ついこの間まで女子大生だったこともあり、まだまだ初々しさを湛えている。入社当初は派手さが目立つスタイルだったが、ここ最近ではファッションやメイクが清潔感溢れるものに変わってきた。彼女がこの会社の気質を理解してきた証拠である。

「一緒にいいですか？」

私は三人に笑顔に向けて訊ねる。

「もちろん」

そう答え、穏やかな笑みを浮かべたのは児島京平課長、三十九歳。私の上司だ。年齢を重ねた渋さと垂れ目の甘さが同居した顔立ちの、営業二課が誇るイケメン課長である。

いつものように、私の胸がドキリと鳴る。午前中のミーティングですと顔を突き合わせていたにもかかわらず、私は秋空の下で見る課長の微笑みに思わず見蕩れた。

彼はいつだって笑顔で、私はいつだってその笑顔の虜になる。が、次の瞬間、私の幸福感は一瞬にして打ち砕かれた。

「花園主任、口が開いてますよ。ぼーっとしてどうしました？」

児島課長の隣に立っていた穴戸朔次郎にからかうようにそう言われ、私は慌てて口を閉じると、すぐににつこりと笑みを浮かべる。

「暑いせいで喉が渴いて、口が開いただけだよ」

「へえ、そうですか」

「そうです」

穴戸君は眼鏡を太陽に反射させながら、口の端を皮肉げに上げている。私は堪らず視線を逸らした。

居心地が悪い……いつもそう。

彼といると、裸にされて心の奥まで見透かされているような気持ちになる。

この穴戸朔次郎という人物は実にややこしい。彼は私より数ヶ月年上の二十八歳であるが、一応私の部下というポジションである。なぜ一応なのかというと、彼は入社三年目でありながら、曾祖父がソーション創業者という経営者一族の一人だからだ。おまけに入社前にはアメリカでビジネスを学んでいたという典型的な御曹司。現在のところ私の方が立場は上だが、彼にはそう遠くない未来にソーションの重役の椅子が用意されているので、普通の社員とはレベルが違う。

それだけでも正直扱いにくいのに、彼は時折なぜか意地悪な口のきき方をしてくる——児島課長と私が話している時は特にだ。私はその度に彼に対して苛立ちを募らせる羽目になっていた。

「お待たせしました。四名様どうぞ」

私達は案内された小さな四人掛けのテーブルに腰を下ろし、揃ってざる蕎麦を頼む。

私は水を飲みながら、対面に座った穴戸君をこっそり見て、ため息を噛み殺した。

ソーション創業者ファミリーの一員でありながら、穴戸君ほど企業イメージとかけ離れた人物はいない。

彼の黒髪は営業職にはあるまじき長さで、襟足は肩に触れるほど長く、前髪は完全に目を覆い隠

している。おまけに鼈甲模様べっこうもようのぶつといフレーム付きのダサ眼鏡を愛用しているので、笑っているんだか怒っているんだか——いや、目があるのかないのかさえよく分からない状態だ。

その上、彼がいつも着用しているスーツは全然サイズが合っていない。肩が落ちてだらしないし、袖だって長すぎる。幅広すぎるスポンは、かの著名な喜劇役者のようで滑稽こっけいなのだが、営業にそんな滑稽さは求められていない。皮肉のお礼に服装について小一時間ほど説教したいぐらいだが、その度に彼は御曹司おんざうし様なのだと自らに言い聞かせ、言葉を呑み込まなくてはならなかった。やがてざる蕎麦そばが運ばれてきて皆で啜すすっていると、ネモモが可愛い声で話しかけてきた。

「花園主任、朝から営業一課で噂になっていましたよ。結婚目前までいった彼と別れたらしって」

私は食事を進めながら、「あゝ……別れたの一月も前だけど……」と、いつものように「適当に返事をする。同僚の前でこういうプライベートなことを訊ねてくる不躰ふていさも、ネモモの若さにかかつては無邪気さに見えてしまうからすごい。

私がその「破局」について口にしたのは、二日前の飲み会でのことだった。飲み会には女四人しかいなかったのに、妙齢の女性が集う職場ではこの手の情報が広まるのは実に早い。

「え、あの副操縦士っていう彼？」

箸を止めた児島課長が、眉をひそめて小声で言った。いかにも気の毒といった表情を向けられ、少し鼓動が速まるのを感じたが、私はいい女風の作り笑いでそれを隠す。

「お休み合わないし、彼も C A さんと遊んでいたのでいいんです。ストレスになるよう

な関係、私には向いていないんですよ。それに新しい出会いもあったから……」

「クールだな」

「クールですよ」

私の答えに児島課長とネモモが口を揃える。

私が彼らの言葉に合わせてクールに微笑んでいると、穴戸君が長い前髪に向こうからこちらを見ている。私の態度に何かおかしいところでもあったのだろうか？

訝いぶしがる私の思いを読み取ったように、穴戸君はかすかに笑みを浮かべて言った。

「新しい出会いってどんな男ですか？ また副操縦士？ 宇宙飛行士とか？ それとも夢の国の王子様ですか？」

その言い方にまた含みを感じて気持ちが悪く立っ。こっちは「失恋」しているのだから、もう少し紳士的な態度で接してもらいたいが、怒ってはこちらの負けだ。

「今度は普通の会社員の人で、まだどうするか検討中なの」

「そうですか、会社員なら僕と同じですね」

私の言葉に意味不明な答えを返して、穴戸君は再び蕎麦を啜すすった。

表情も変えずに淡々と食事をする様子は、ちつとも美味おいしそうに見えない。ホント、何を考えているのかさっぱり分からない人だ。

児島課長が場を和ませるように、ゆったりと微笑んで言った。

「ま、花園はモテるから別れても次に困らないよな。土日休みの会社員だったらデートもしやすい

し、いいんじゃないか」

心に染み入る彼笑顔から逃れるように、私は箸に視線を落としながら答える。

「はい。新しい出会いでまた新しい自分になれたらいいなって思うんです」

「新しい出会いで新しい自分か。既婚者にはそんな自由ないから羨ましい限りだな」

無理やり引っぱり出した微笑で課長の言葉を受け止めながら、私は信州蕎麦を啜った。美味し
いはずなのに味がしない。

私はいつものように、児島課長の左手の薬指に嵌るシンプルなプラチナリングに視線を彷徨わせる。時々磨いているのか、それは結婚五年目にもかかわらず、まだ眩しいほどに輝いている。

その輝きに魅入られたようにぼんやりしていると、私の思考に穴戸君の声が割って入ってきた。

「花園主任、また口が開いてますよ」

そう言った彼の声色は威圧的なほどに冷たい。私はその声を無視して、気まずさを振り払うように蕎麦を口に運んだ。ここで何か言い返しでもしたら、上司としてあるまじき発言をしてしまいそうな気がする。それでも社内では「グールなビジネスウーマン」「素敵な上司」で通っているのだ。それに、無駄に大きなバックを持つこの男に反抗するのは得策ではない。

なのに穴戸君はまだ絡んでくる。

「僕もぜひ新しい花園主任を拝見してみたいです。本当に新しい出会いで新しい自分になれたらいいですね」

「……ご覧にいられるよう努力します」

もう何なの。こんな時に限って彼は営業らしい、とてもいい笑みを浮かべている。穴戸君が言葉を発する度に嫌みたらしく聞こえてしまうのは、私だけ？

ただ、正直に言えばこのおぼっちゃん、仕事はしつかりとできているし、ミーティングで時々ハツとするような発言をしたりと、侮れない部分も多くあるのだ。油断していたら足元を掬われる気がして、いつもソワソワしてしまう。

そして、一緒にいればいるほど私の「内面」を覗かれてしまいそうで……

出来ることなら一緒に働きたくない人間、ナンバー1。

だけど私は「素敵な上司」として我慢するしかないのだ。

彼は二十五歳で中途入社した時から、将来の道が決まっている。三年ほど営業職を経験した後はマーケティング部へと異動し、時期を見て役員入り。

噂によると穴戸君の父親である現社長と、兄にあたる長男の穴戸洋太郎常務が経営方針の違いで揉めているらしく、その仲裁役にと周りの重役達が次男の穴戸朔次郎を中途入社させたのだという。こんな人間が仲裁役になれるかどうか大いに疑問なのだが、未永くこの会社でお世話になるためには、この穴戸君とも仲良くやっていくことが必須である。

ダサ眼鏡でも、喜劇役者スーツでも、性格に問題ありでも、一応上司として当たり障りなく仕事を共にし、彼がめでたくマーケティング部へ移る日には、満面の笑みで営業部から蹴り出したい。

この日の終業後、軽い残業を終えて帰宅しようとしていた私は、立ち寄った社内のパウダールー

ムで経理部の女性陣に声をかけられた。

化粧品会社ということで、トイレの隣にはパウダールームが併設されている。休憩時間や終業後は女性達の溜まり場となりがちだった。

「花園主任、私達、七時半から研究所と合コンなんです。でも人数足りなくなっちゃって……もし今晚空いていたら、来てもらえませんか？」

顔見知りの女性社員が愛想よく言う。彼女は恐らく二十代半ばだろう。入社三年目あたりのこの年齢層が一番プレ婚活——つまり婚活の前段階、結婚を視野に入れた男性を捕まえるのに忙しい。化粧品の研究開発を行^{おこな}っている研究所は口下手な理系男子ばかりだが、医療関係の資格を保持している者が多く、給料もいい。まさしく未婚の女性社員に狙われやすい部署である。

彼女としては自分より若い子は誘いたくないので、私ぐらいが適任と考え声をかけたのだろう。通常なら美味^{おい}しい合コンのお誘いではあるが、私はにつこり微笑んで答える。

「誰かに聞いたんでしょう？ 私が彼と別れたって」

「男達が噂してましたよ。フリーになったらしいって。花園主任を狙ってる男性社員は多いですから」

「お世辞はありがたく受け取っておくけど、私、社内恋愛は避けているから今回はパスするね。それにこれからデートだし」

私は時間を気にするそぶりでスマホを取り出し、ディスプレイをタップする。だけど私の目はディスプレイなど見ずに、スマホケースに無理やり取り付け付けた古い携帯ストラップの先を見ていた。

「彼」がくれた携帯ストラップ。貰った時には三つ付いていたクリスタルは、いつの間にか残り一つになっている。後の二つは失くしてしまった。今では会社を出る直前に、いつもこうして最後の一つがそこにあるか確認するのが私の日課のようになっていた。

「花園主任、もう次いるんですか？」

探りを入れてきた甲高い声^{かんだか}に対し、私は上品な笑顔で肯定してみせる。

そしてこれ以上詮索^{せんさく}される前に、颯爽^{さつそう}とパウダールームを後にした。

一年間付き合ったちよつと浮気性の副操縦士。その前は一コ下の広告代理店勤務。あの時は、彼のマザコンが原因で別れたんだっけ。次の彼はどんな男にしよう。

マンションの部屋で一人、私は自社の新製品であるマニキュアの蓋^{ふた}を開けながら考える。

今回の商品はマニキュア独特のきつい匂いがしないのが特徴らしい。鼻を近付けてみると確かにそれほど強い匂いではなかった。

塗りやすさを確認しながら、私は足の爪にそれを塗っていく。

手の爪は数日前にネイルサロンでフレンチネイルにしたばかりだ。ネイルも営業先での商品紹介に使えるので、私は自社製品をサロンに持ち込んでプロに仕上げてもらうようにしている。

ただし仕事に見せることのないペディキュアは、いつも自分でしていた。

私の足は長年ハイヒールを履き続けた影響で、足の小指と薬指の爪が割れて醜^{みにく}い。その上、親指以外はハンマートウで変形しており、人様の目に晒^{さら}すのも恥ずかしい状態だ。

——美しい容姿に美しい名前。その上、仕事はできて会社仲間にも慕_たわれる。まったく花園は完璧な女だな。

私はこの三年間、何度も記憶から引つ張り出した言葉を思い出す。

完璧な女？

「完璧なんかじゃない……」

私は、たくさんのぬいぐるみ達に囲まれて座る「じゃむじゃむ」に向かって呟_{つぶや}いた。じゃむじゃむは一メートル大の巨大な熊のぬいぐるみ。私に彼氏がいるとすれば、このじゃむじゃむだけだ。そう、本当は副操縦士の彼氏なんていない。だから別れてもいいない。

その前の彼氏も、次の彼氏も、全部、全部、ぜんぶ、嘘_{うそ}っぱちだ。当然、私は真正銘の処女。グルーなビジネスウーマン”の正体なんて、こんなもの。

会社ではそこそこのポジションにいて、アラサー。容姿も出来るだけ綺麗に見えるよう整えている。そんな女、適度に彼氏がいることにしていた方が周りも納得してくれる。もしかして処女なのかなんて勘ぐられたら、恥_はずかしさと情けなさで出社拒否にでもなりかねない。

改めて考えてみれば、私はとことん恋愛体質ではないと思う。

合コンは好きじゃないし、その上、なかなか恋に落ちることもない。ただし一度落ちれば一気にズドンと落下して、浮上することができない。

このじゃむじゃむにしても、高校生の時に友人グループから誕生日プレゼントとして貰ったものなのだが、そのグループの中に好きな男の子がいたからこそ後生大事にしてきたのだ。

そして、この古い携帯ストラップも同じだ。

ストラップ部分は千切れて短くなり、装飾のクリスタルは一つとなり、それでもスマホケースに無理やり穴を開けて使っている。これは、入社一年目のホワイトデーに、「彼」が義理チョコのお返しにとくれたものだった。私にとってそのチョコは、「義理」のフリをしたものだったのだけだ。

営業部第二課、児島京平課長……

高校以来、恋した相手が既婚者だなんて、自分が嫌になる。

私の入社当時、彼はまだ独身で、決して要領がよい方ではなかった私を辛抱強く育ててくれた。私が失敗した時は、一緒に営業先で頭を下げてくれたことだっただけ。

彼に迷惑をかけたたくないと必死に仕事を覚え、彼に認められる度に仕事が楽しくなった。

やがて自分が児島課長に恋していると気が付いたのと、彼がソーシヨンの受付嬢と婚約していると知ったのはほぼ同時だった。

片想いにも到達しないような、出来損_{できそこない}ないの恋。

行き所のない恋は誰にも知られることなく私の心で腐り、その間に児島課長は宝石のように輝く美しい花嫁を手に入れた。彼のスマホの壁紙が奥さんとのツーショット写真であることも知っているし、最近はお子さんを欲しがっていることも耳にしている。

ラブラブな夫婦の間に割り込んで、どうこうしたいわけでは断じてない。だから私は、いつだって児島課長の前では架空の彼氏の話をして、架空の素敵な恋愛を楽しんでみせている。

——まったく花園は完璧な女だな。

入社三年目、営業として大きな仕事も狙えるようになった私にそう言った彼は、私の本当の姿など知る由もない。本当の私は、いい歳しながらも処女で、歪んだ片想いを捨て切れない重たい女だ。——新しい出会いで新しい自分になれたらいいですね。

突然、穴戸君の淡々とした声色が耳底から響いてきて、私はびくりと体を震わせる。

私の何を知っていてあんな口をきくの？ 何で私が言われたくないことばかり口にするの？

もう！ 穴戸朔次郎、だいつ嫌い！

「あ……」

ふと私は、あと二週間ほどすれば自分の誕生日であることを思い出し、思わずため息を吐き出した。

もうすぐ二十八歳。

新しい出会い、新しい自分、か……

二十八歳の私は、何か変わることができるようだろうか？

それともやっぱり歳だけ重ねて、中身は何も変わらないまま？



「あ、穴戸君、待つて。そのミストスプレーに試供品貼り付けるから」

私は穴戸君が陳列しようとしていたスプレータイプの化粧水を取り上げて、その瓶に美容液の小さなサンプルを貼り付けていく。

普段はお腹の中で悪態を吐いていても、仕事ではあくまで「素敵な上司」でいたい。

「このタイプの化粧水は秋になったら一時的に売り上げが落ちるでしょ。本格的な冬が来たら、肌が乾燥するからまた売り上げも回復するけど、その間のフォローと冬商品の売り込みを兼ねて試供品をプラスするの。女性って小さなオマケに釣られちゃうから、こうすると結構商品が動くんだよね」

「そうですね。ありがとうございます」

彼は素直に同意すると、試供品付きのミストスプレーを受け取って棚に並べていった。

近日中に穴戸君の担当地域に新しくドラッグストアがオープンするので、今日は彼と二人でオープン準備の応援に来ていた。新店への応援は、販売企業との信頼関係を築く大切な仕事だ。

私の現在のメイン業務は、百貨店などに派遣する美容部員の取り纏めなのだけど、今日の仕事はドラッグストア担当である穴戸君のフォロー。以前は私が担当だったが、穴戸君に丸々引き継いでもう二年半になっていた。ドラッグストアでの仕事は久々だ。とはいえ、仕事の要領は心得ている。「花園主任、その棚の日焼け止めところに夏ポップをお願いします」

私が秋冬用のスイングポップを棚に取り付けていると、穴戸君が夏用のポップを差し出しながら言う。見れば、ヤシの木のイラストと共に『陽射しと戦え！』とのアオリ文句が書いてあった。

九月中旬にこれはないんじゃない？ と訝る私に、彼は淡々と説明し始める。

「新店オープン後しばらくは、天候を見てポップを変更するようにしてるんで、とりあえず今はそれ付けといて下さい。今の時期、夏の初めに買った日焼け止めがなくなるから、買い足す人が多いんです。それに、他社も夏商品の売り場を縮小してきますから狙い目です」

眼鏡の向こうで無表情に言われ、私は言い返すのを止めた。

鋭い。言われてみればその通りだ。こんなことに気付かないなんて、上司として面目ない。

マニュアル通りに動くなら誰でもできる。ユーザーの動きや天候の変化を読んだ柔軟な営業力が必要——そう彼に教えたのは私ではなかったか。

穴戸君は淡々と仕事をこなしているように見えて、その裏で繊細な思考を張り巡らせている。こうやって二人で仕事をしていると、悔しいけれど感心すること多い。

私はこっそり穴戸君を窺い見る。ジャケットの肩部分が体からずり落ち、相変わらずだらし無いけれど不思議だ。穴戸君はこれだけ繊細な仕事ができるのに、どうして服装や髪型にここまで無頓着になれるのだろうか？ 単に服装センスが壊滅的なだけ？

わざとダサく装うはずはないし……一緒にいればいるほど釈然としない気持ちになる。

「花園主任、その脚立、不安定なので上段は僕がやります」

一番上の棚に在庫を並べようと小さな脚立を持ち出してきた私を見て、穴戸君が言った。

脚立を立ててみれば、確かにグラついている。

「大丈夫。そんな高い場所じゃないし、少しだけだから」

彼の申し出を断って私は脚立に上った。

今日は搬入時に台車の車輪が外れるというトラブルに見舞われていた。そのため、穴戸君が「僕が持ちます」「僕が運びます」と言って力仕事を買って出てくれていたのだ。彼はいつもの淡々とした態度だったが、このままではさすがに上司として立場がない。

彼の普段の態度がアレなだけに出来れば頼りたくない、無意識につまらない意地を張ってしまつたのかもしれない。

脚立に上り、上の棚に商品を置こうと手を伸ばした途端、足元が大きく揺れた。

慌てて足を踏ん張ったけれど、不安定なハイヒールが小さな足場を踏み外す。

「きゃっ！」

体が宙に放り出されると同時に、足元で大きな音がして脚立が倒れた。

スローモーションのように自分の体が床に吸い込まれていく。私は硬いフロアに打ち付けられるのを覚悟した。

が、私が背中から着地したのは、柔らかく弾力のある場所だった。

それが穴戸君の胴体だと気が付いたのは、目を開いた瞬間、眼鏡の奥にある彼の瞳と出会ったから。顔は思い切りしかめられているのに、レンズの奥にある瞳はどこか私を心配してくれているようにも見えた。

「ごー！ ごめん、ごめんなさい！」

彼の腕が、守るようにそっと私の腰に添えられている。私は恥ずかしさで頭がいっぱいになり、慌てて立ち上がる。穴戸君、私から少し離れた場所にいたはずだけど……もしかして咄嗟に駆けつ

けてくれたのだろうか？

「……怪我はありませんか？」

「し、穴戸君こそ……私、重たかったでしょ」

男性の存在をこんなに近くに感じたせい、私の心臓は羞恥で高鳴っていた。

「重さはともかく、もう一回受け止めるのは遠慮したいので、その仕事は大人しく僕に任せて下さい」

「ごめんね……」

羽根のように軽い体重でないことは分かっている、私はもう一度彼に謝罪する。穴戸君は「もう謝らなくていいです」と素っ気なく言い、私が床に散らばってしまった商品を拾ってくれた。小さく背伸びをして棚の最上部に在庫を並べていく穴戸君を見ると、案外身長が高いんだと今さらながらに思う。

「あの、ありがとう。助けてくれて」

謝罪はしたけれどお礼がまだなことに気が付いた私は、乱れた服装を整え、改めて言った。だけでも穴戸君はこちらを見向きもしない。

「意地を張らず、たまには素直に僕の言うことも聞いて下さい」

背中であつきらぼうに言った彼の言葉に、またしても反論ができなかった。

商品陳列の作業が終了したのはそれから一時間ほど経ってから。窓の外の景色はすっかり夜へと変わっている。久々の作業で体はジワジワと疲労し始めていた。

「私の方はこれで完了かな。穴戸君は？」

「はい、僕も完了しました。後は店長のところに挨拶に行つて終了です」

空になった段ボールを片付けて作業終了を確認した私達は、二人で新店の店長のもとに挨拶に向かう。だが、その後ドラッグストアを出たのは、さらに一時間も経つてからだった。

開店準備に追われドロドロに疲れている店長を見て、穴戸君がトレットペーパーの積み上げや大量のゴミ捨てなどを手伝い始めたからだ。彼は私に對し、これも力仕事だから手伝わなくていいと言ったけれど、上司としてはそういうわけにもいかない。

結局遅くまで穴戸君に付き合ひ、営業車の助手席に乗り込んだ時にはぐったりとへばつてしまっていた。もう夜の八時を超えているので直帰でいいだろうと判断し、私は穴戸君に駅に近いくところまで送つてほしいと頼む。申し訳ないが、穴戸君には会社に車を返しておいてもらおう。

滑らかに走り出した車の中で、私は思わず深く息を吐き出し愚痴ってしまう。

「新店舗に顔売しておく必要は分るんだけど、あそこまでしなくてもよかったのに……トレットペーパーとかドリンクとか、他社製品なんだから」

「あの店舗、企業直営ですから店長も事業本部の社員なんです。本部に顔売つとくと、後々仕事がしやすいんで」

上司の不服に、穴戸君は車を運転しながら淡々と言った。

何というか……やつぱり仕事に対する嗅覚が優れていると認めざるを得ない。確かに本部の社員に気に入られると、全店舗共通キャンペーンやチラシ連動企画の提案も了承してもらいやすい。そ

んな企画が通れば、動く金額も大きいので、大金星になるのは間違いない。

それにしたって、彼のだらしない身なりはどうなのだろうと思うけれど。

そんなことを考えつつ、私は背もたれに体を預ける。

夜の街並みに黄色やオレンジの明かりが瞬くのを眺めながら、晩ご飯は何にしようと思ふ物のことばかり考える。お腹は相当減っている。もう作るのも面倒くさいからコンビニにでも寄って帰ろうかなんて考えていると、車は大通りを逸れて脇道に入ってしまった。明らかに近くの駅とは別の方向。

あれ？　と思っている間に、穴戸君は慣れた様子で小さな路地を抜け、コインパーキングに営業車を停める。

「晩メシ食いましょう。この近くに旨い店があります」

そう一言だけ告げ、彼は車を降りて歩き出した。

ちよつと待つて！　誰もOKなんてしてない！

……とツツコミを入れたところだけど、疲れているわ空腹だわで声が出ない。

穴戸朔太郎、嫌味っぽいだけでなく超マイペースというか……自分勝手！

普通『晩メシ一緒にどうですか？』とか『何が食べたいですか？』とか、打診するのが先ではないだろうか？　仮にも私は先輩だ。今のところ上司だ。後々は立場が逆転するとはいえ。

けれど、空腹で反論もままならない私には、彼の背中を追いかけるしか選択肢はなかった。

程なくして彼が扉をくぐったのは、一軒の古い居酒屋だった。お洒落感の欠片もない、うらぶれ

た個人経営の居酒屋。一部上場企業の創業者ファミリーが女を連れてくるところとは思えない。

「ここは牛すじ煮込みが旨いです。ビールに合います」

勝手に二人掛けのテーブルに陣取った穴戸君は無表情にそう言うと、店員に自分用の親子丼注文する。今日の運転手は彼だから、アルコールではなくご飯物なのだろう。

「飲みたかったら、車は私が会社に返しておくよ」

「僕が運転します」

私の提案を、彼は無愛想な一言で却下した。

上司として気を遣ったつもりなのに、もう！

ここはアルコールの力を借りて苛立つ気持ちを落ち着け、お腹を満たして幸せにならねばと、私は牛すじ煮込みと大根サラダ、生ビールを頼んだ。

運ばれてきたビールを乾杯することなく、一人勢いよく飲み始める。ビール一杯で酔う体質ではないけれど、空きつ腹にアルコールが沁みていくのが分かった。

気持ちが悪く落ちていくと、この居酒屋は古いけれど、決して寂れてはいないことに気付く。こんな小さな路地裏にあるのに、席は常連客らしき人達で埋まっているし、厨房から次々と運ばれていくお料理はどれもこれも美味しそうだ。

「穴戸君もこういう庶民的なところで食事するんだね……あ、美味しい」

ちよつと運ばれてきた牛すじ煮込みを口に運んだ私は、トロリと口の中で溶けていくお肉の美味しさに唸った。しっかりと味のしみ込んだ牛すじ煮込みは、ビールと一緒に食べると止まらなくな

る。穴戸君の前に運ばれてきた親子丼も、卵の絶妙な半熟加減がすごく美味しそうだ。

思わず唾を呑み込んだ時、穴戸君が白い歯を見せて笑った。食い意地の張っているのを見られてしまった。私は慌ててビールを飲んで恥ずかしさを紛らわせる。

「この店、なかなか旨いでしょ？ ……花園主任の彼氏はもつと高級な店に連れていつてくれるのかも知れませんが……宇宙飛行士だか会社員だかでしたっけ？」

俯いて親子丼を口に運びながら穴戸君が言った。

また意地悪な口のきき方だったので、私は少しムツとする。

『私は寛大な上司、素敵な上司』と自分に言い聞かせながら、再びビールを喉に流し込む。

「元彼は宇宙飛行士じゃなくて副操縦士ね。ま、確かにこういう場所はデートではなかなか来ないけどね」

「ま、僕もは花園主任をデートに連れてきたつもりはありませんけどね」

そう言つて穴戸君は、顔を上げてこちらを見据えた。

「……あと、そういう嘘、いつかバレますよ」

もう一口と流し込もうとしたビールが、喉のあたりで止まった。

声が出ない。ビールが上手く飲み込めず気泡が口の中で不快に弾け、背中からは冷や汗が噴出する。

「花園主任、二年半一緒に仕事をしているんです。あなたの視線が誰を追ってるのかぐらい分かります。気を付けた方がいいですよ」

「なに……言ってるの」

やっと絞り出した声は掠れていた。眼鏡の奥からは強く厳しい視線が放たれ、私を捉えて離さない。ビールどころか、もう水一滴も喉を通らないほどに私は動揺していた。

落ち着け、落ち着け。ボロを出すな。彼に本当の自分を見せるわけにはいかない。剥がれそうになるメッキを必死でかき集め、私はクールな花園空美を蘇らせようと試みる。

だけど全てを透かし見るような彼の瞳を前にすると、そんな努力も空回りするだけだった。余裕の笑みで否定してやろうと思うのに、私の口角はビクツと小さく痙攣するだけで上手く笑えない。ぐるぐる、ぐるぐる、酔ったわけでもないのに、頭の中で穴戸君の言葉が廻る。

——あなたの視線が誰を追ってるのかぐらい分かります。

心がわし掴みされたように痛む。入社以来、私の心をこんなに鋭く暴こうとする人間なんていなかった。みんな彼氏ぐらい当然いるだろうと思い、疑うことはなかったのに。

「なに、言ってるの」

息も絶え絶えに同じ言葉を吐き出したが、やっぱり続きの言葉が出てこない。

よりによって社長の息子に知られるなんて……

この男には管理職を吹き飛ばすぐらいの力はある。何もやましいことはないけれど、いや、だからこそ変な疑惑を持たれて、児島課長に迷惑をかけるわけにはいかなかった。

そう思った次の瞬間、眼鏡の下にある唇が薄く弧を描いた。

「あ……花園主任。カマかけた程度でそんなに動揺するぐらいなら、くだらない嘘なんかつい

ちゃダメですよ。……大当たりみたいですね」

そう言った彼の顔がひどく蟲惑的こむくもくに見えて、私はドキリとする。

何よ突然。普段は笑顔なんて見せないくせに。

「児島課長ですよ。止めた方がいいですよ。不倫なんて女が得することは何もない」

「そんなじゃない！」

私は反射的に立ち上がり、怒鳴っていた。

居酒屋に満ちていた和やかなざわめきがピタリと止まり、いくつもの視線がこちらに向けられる。私は慌てて座り直し、眼鏡の奥で鋭く光る彼の目を睨にらみつけた。思いのほか大きな目が眼鏡越しに私を見つめている。

私は出来るだけ平静な顔で声を絞り出す。自分のプライドより、いつも優しい笑顔をくれる課長を守る方が大事だ。

「不倫とか、そんなじゃない。児島課長には何も関係ないことだから……頼むから……」

私の言葉に反応して、穴戸君の表情がニヤリと歪ゆがむ。

「頼むから黙っとけ？ ……頼み事はタダじゃ無理ですよ」

伸びてきた彼の腕が私の手を掴んだ。次の瞬間、強い力で引き寄せられ、私は否応いやおうなしにテーブルの上に上半身を乗り出す羽目になる。

何もかもが一瞬の出来事。私は反射的に体を強張こわばらせたが、穴戸君は腕を離してくれない。

「穴戸く……」

「つたく……そんな顔をされると……」

腰を浮かせた彼の体が近付いてくる。小さなテーブルがガタツと音を立て、空からになっていたグラスが揺れた。

彼の眼鏡がどんどん近付いてきて、その奥にある瞳が私の視線とぶつかる。

その直後、私は穴戸君に唇を奪われていた。

私は抵抗するのも息をするのも忘れて、ただ一方的なキスを受け止める。

今、私の唇を塞ぐ温かく柔らかい感触が彼の唇だなんて信じられない。他人の体温が自分の唇に浸透していく感覚に、私はただ圧倒おさされていた。

やがてチュツと唇を吸われ、私は魔法が解けたように自分の置かれた状況に気が付いた。慌てて首を捻ひねって唇を離し、無我夢中で彼の腕を振り払う。強く握られていると思った腕は、あっけないほど簡単に解放された。私はへなへなと椅子に座り込む。

キス……キスされた。

そう理解した時、私は再び飛び上がるように立ち上がり、即座に踵かかとを返して走り出していた。

客の注目を背中に集めながら、私は居酒屋を飛び出す。

彼から逃げなければという焦りに突き動かされ、私は夢中で来た道に戻った。パンプスが打楽器のように鳴り響き、私の心臓もそれと同じほどに打ち鳴らされる。息苦しくて倒れてしまいそうだ。パーキングに停めた車の前まで来て、車の鍵を持っていないことに気付いた私は、自分の愚かさおろにがっかりと膝をつきそうになる。ここに戻ってきてどうしようというのだ。

「ああー！もう、バカ」

一人自分を罵^{ののし}り、私は車の前で地団太^{じだんた}を踏む。おまけに財布とスマホは持っているが、他の荷物
は車の中に残したままだ。一体どこに向かえばいいのかと、混乱した頭で周囲を見回してみるが、
見えるのは夜の闇ばかり。私は途方に暮れてしまう。

そうしているうちに地面を蹴る音が近付いてきた。穴戸君が追いかけてきたのだ。

彼は私の姿を確認すると立ち止まり、ふう、と息を吐き出して長い前髪をかき上げる。闇の中で
は彼の表情はよく見えない。ただ、柔らかそうな髪が夜風にそよぎ、前髪の間から夜の闇を映す眼
鏡が私を見ているのが分かった。

「……送ります」

彼はそう言つて車のロックを解除した。

「一人で帰る」

「……一人で帰れるんですか？　ここがどこかも分かっていないでしょう？　……すみません。失
礼なことをしたのは謝罪します。きちんと家まで送るので乗って下さい」

そう言つた穴戸君の声は、いつもの淡々としたものだ。そう、さっきのキスなど、なかったみた
いに。

彼は助手席のドアを開け、私が乗り込むのを辛抱強く待っていた。

少し冷静になった私は、大人しく助手席に乗り込んだ。

キスぐらい……ううん、キスなんて何年ぶりだろう。

夜風が唇の表面を撫^なでたと同時に、私は穴戸君の唇の感触を思い出す。

自分の下^{もと}から追いたいと思つていた男の唇はうるたえてしまうほどに柔らかくて、あんな強
引なキスなのになぜかどこまでも優しく……ああ、もう！

あのキスの瞬間、何か不思議な力に囚われた気分だった。私は抵抗できなかった自分を思い出し、
再び一人悔しがる。

そんな私の葛藤^{かつとう}など知らない穴戸君は、私の住んでいる街の方角を確認すると、サイドブレーキ
を解除して無言で車を走らせ始めた。

しばらく行くと、窓の外に見慣れた景色が映り始める。もうすぐ家も近いと思うと、次第に高
ぶつていた感情も凜^ないできた。

すると改めて、先ほどの居酒屋での彼の言葉が気になり始めた。彼はきつと、私と児島課長との
関係を誤解している。

私は一つ息を吐き出して、背筋を伸ばす。一度剥^はがれてしまったメッキで自分を包み隠すかのよ
うに気持ちを入れ替えた。

「穴戸君、誤解されたら困るからもう一度言っておくけど……児島課長とは本当に何も無いの」

私が前を向いたままそう言つても、穴戸君は黙っていた。彼もまた、ただ真っ直ぐに前を向いて
運転している。

車はヘッドライトに浮かび上がる道を滑らかに走り続けていた。いつもはぴたり額に張り付い
ている彼の長い前髪が、少し乱れている。きつとさつき走ったからだろう。

穴戸君が道路標識に視線をやり、ウインカーを出して右折する。

「どのあたりで停めたらいいですか？」

「駅前で降ろして。そこから近いから」

彼は無言のまま駅前に向かって車を走らせる。やっぱり何を考えているのか分からない。私は二人の間にある静寂に、焦燥感をかき立てられた。

沈黙に耐えられなくて、私は何かを取り繕うように話し始めていた。

「児島課長は仕事で色々お世話になっている、尊敬する上司なの。それ以上でも以下でもない。穴戸君だって児島課長が部下思いの上司だって分かっているでしょ？ そんな児島課長に特別な感情なんて……」

「児島課長、児島課長つてうるさいですよ。運転に差し支えるので黙っていて下さい」

そう言った次の瞬間、感情のなかった穴戸君の表情が揺れ、苛立ちが表れる。

「……だいたい今さら何言っても遅いんだよ」

穴戸君はゆっくりと駅前の駐車場に車を止め、サイドブレーキをかける。そして眼鏡を外すと、ダッシュボードの上に乱暴に投げた。

「……そうだろうとは思ってたけど……カマかけたら見事に動揺して……」

「え？」

「クルルに振る舞っているつもりかもしれないけど……隙だらけだ」

先ほど私を真つ直ぐに見据えた大きな目が、再び前髪の間から見え隠れしていた。

その長い睫に縁取られた瞳は、夜の光を反射させながら冴え冴えと澄み渡っている。綺麗な二重。そのすぐ上にはキリッとした眉があった。

いつもの穴戸君とは違う声色と、普段しつかりと見ることはない彼の目。それらに囚われた私は、どこか危険な空気を感じながらも視線を離せない。

「今も隙だらけ。こっちは我慢してるのに、そんな顔をされたら襲ってくれて言ってるようなものだ」

あ、と思った時には、私の肩はシートに押さえつけられていた。

穴戸君の顔が迫ってくる。そのあまりに綺麗な瞳に魅入られて、私は動けない。

キスされる。そう悟った時、私は何を思ったのかバカみたいに目を閉じていた。

すると、私の肩を押さえる力が一瞬ぎゅつと強まり、その後ふつと弱まった。

思わず目を開けた私は、鼻先に迫った彼の大きな瞳と出会う。

その黒目がギリリと光り、彼の顔に傲慢な微笑が浮かぶ。私はやはりその顔から視線が離せない。

「ほら、隙だらけだって言っただろ」

穴戸君は笑みを湛えた唇で私の唇を奪う。

襲うというにはあまりにも優しいキス。意地悪な瞳で仕掛けられた、二度目のキス。

重なり合った部分だけが敏感になってしまったかのように、私は彼の唇の温度や繊細な皺、吸い込まれていきそうな柔らかさをまざまざと感じる。

車内で自分の心臓の音だけが大きく鳴り響く。けれど、その高鳴りは次第に警告音に変わって

いった。

いけない。このままじゃ完全に囚われてしまう。

体を捻^{ひね}って逃れようと試みた瞬間、そうはさせないとも言^いうように彼のぬるりとした舌先が入ってきた。強気なキスが、脳を支配していた甘い薄霧^{うすぎり}を振り払う。

「な！　なんでっ！　な、なに」

また、またキスされた。そして私、またボーッとされてるがまま……バカ、私、バカ！

穴戸君の大きな目が私の視線を絡め取る。私は顔が火照^{ほて}ってくるのを感じながら、感情を見せない目の前の男に怒りを覚えていた。

彼の腕から逃れた私は、思い切り彼の頬を張り倒す。

バチンッ！　乾いた音と、手のひらの痛み。

勢い余って放った私の平手打ちには、遠慮なんてなかった。

「あ……俺、やつば嫌われてんなあ」

穴戸君は小さく呟^{つぶや}くと、薄笑いを浮かべる。

私はそんな彼の視線から逃れるように車から降り、走り出していた。

二度のキス。

マンションの自分の部屋に戻った私は、洗面所で化粧を落しながら鏡に映る自分の唇を眺める。たかがキス。高校生がふざけてするような、他愛もないキス。

気にしないでおこうと思うのに、私はいつまでも自分の唇から目を離せずにいた。

穴戸君の黒目がちの大きな瞳が、脳裏から消えない。

眼鏡越しではなく、初めて直接見た彼の瞳。透明感のあるその瞳は、反射鏡みたいに輝き、その向こうにある感情を隠そうとしているようにも見えた。

私は洗面所から出ると、いつものごとくじゃむじゃむの腕を引っ張って抱きかかえる。幼児が毛布を抱いて安心するのと同じで、私もいつだってじゃむじゃむのモフモフな毛並みで癒^いされる。

「キス……」

私は独^{ひとり}りしながら、自分の唇を人差し指でなぞった。

キスなんて、大学時代のコンパで酔っ払った知らない学生に冗談半分でされて以来だ。その時のキスは、唇を離れた途端に忘れてしまうようなものだったけれど、穴戸君の唇の感触はまだ私の唇の上にある。

私は蘇^{よみがえ}ってきた感触に、思わず足をバタバタさせてしまう。

全然好きじゃない男性に突然キスをされたのに、そのまま受け入れてしまった自分が情けなく恥ずかしい。二度目なんてキスされるのが分かっていたのに、目を瞑^{つむ}ってしまった。あれじゃキスを待っていたみたいじゃないか。

——そんなことない。あんな男、大嫌い。

そう自分に言い聞かせる私を、じゃむじゃむのプラスチックの目が白^{しろ}けたように見ている。私は思わず目を逸^そらした。

だいたい穴戸君だって、私と同じ気持ちのはずだ。二年半一緒に仕事をしてきて、意地悪を言われたことなら何度もあるけれど、好意を感じたことなどない。きつと嫌がらせだ。そうに違いない。同い年なのにあれこれ指示する女上司をちよつとからかつてやろうとか、そんな嫌がらせ的なものなのだろう。そうでなければ、ただのキス魔とか？

けれど、あの強い眼差し……微笑を湛えた唇で……

「だあ！」

また思い出しかけて、私は思わずじゃむじゃむのお腹にパンチを入れてしまった。

とんだ八つ当たりで、じゃむじゃむゴメンなさい。そう素直にぬいぐるみに謝ったところで、私は穴戸君に思いっきり平手打ちを食らわしてしまったことを思い出す。

男性とのお付き合いの経験すらない私なので、どんなに考えてみたところでその真意などよく分からない。が、百パーセント嫌がらせだったとしても、やっぱり暴力はよくなかった。

しかも相手は勤め先の御曹司様。児島課長への想いまで知られてしまっているのだから、歯を食いしばってでもキスの一つや二つ、我慢しなければいけなかったのだ。

じゃむじゃむのお腹に顔を押し付けモフモフしていたら、また穴戸君の大きな瞳が脳裏に蘇ってくる。

怖いぐらいに深く澄んだ夜のような黒目、視線の鋭さを緩和させる長い睫。

私はその記憶を打ち払うように、じゃむじゃむのお腹にボツンボツン頭突きした。うう……また八つ当たり。

よし、とりあえずキスのことはきつぱり忘れて、穴戸君に暴力を振るつたことを謝罪しよう。

そう決めたはずなのに、目を瞑る度にまた彼の唇の感触を思い出す。

この夜、じゃむじゃむは私に何度もボツンボツンされたのだった。



謝らなければならないと思いつつも結局何も言えず、何事もなかったかのように一週間が過ぎた。私は、穴戸君と目を合わせることもさえできずにいる。仕事中も出来る限り目を逸らしている始末だ。彼と目を合わせてしまうと、きつと私は長い前髪の奥に隠されている大きな瞳を意識してしまうだろう。でも、そんなこと気付かれたら、キス一つで惚れたなんて誤解されかねない。

そんなのはまっぴらごめんだ。いくら私が彼氏いない歴〃年齢でも、最後にキスをしたのが六年前で、しかもそれが名前も知らない相手だったとしてもだ。

あんな傲慢男、百回キスをされても土下座で告白されても好きになるもんか。

そう自分に強く言い聞かせ、私は指を叩きつけるようにパソコンのキーボードを打っていく。すると、デスクに見慣れた大きな手が伸びてきて、ひよいとそこにあつた書類を掴んだ。

「花園、お客様アンケートの要望内容、エクセルで纏めてるのか？　そこまでしなくても一通り目を通して、ファイリングするだけでいいぞ」

アンケート用紙とパソコンのモニターを見比べてそう言ってきたのは、児島課長だ。

ソーションでは美容部員が百貨店のカウンセリングコーナーで接客する際に、お客様アンケートを実施している。現在百貨店の美容部員の取り纏めまとをしている私にとって、アンケート用紙の回収・チェックも仕事の一つだった。

児島課長は優しい顔で、私に向かって穏やかに微笑む。

課長はいつもこんな感じ。空に浮かぶ雲のようなフワフワした笑みを絶やさない人だ。

「纏めたってほどじゃないんですが……最後の、その他ご要望の欄の内容を並べていくと、お客様のニーズがリアルに出てくる気がするんですね。BBクリームが爆発的に流行はやって以降、オーリンワンコスメを求める声っていうのはすごく高くて……薬用リップにグロスの効果を加えて、さらに何かもう一つ付加価値を付けた商品があれば売れるんじゃないかな、なんて考えているんです。学生の子がポケットに忍ばせて気軽に使えて、なおかつ友達に見せたくなるような可愛いパッケージだと、ヤング層に受けると思うんです」

「薬用リップグロスか。花園は入社の時、マーケティング課に配属希望だったもんな。そういう着眼点はさすがだと思うよ。そのアイディア温めておけよ」

児島課長の笑顔は時に優しすぎて、受け止めることができない。私の視線は半ば無意識に彼の左手の薬指に向かった。

冷たく光るプラチナの結婚指輪。

——児島課長ですよ。止めた方がいいですよ。

耳の奥から声が聞こえた気がした。

ギョツと胸が締め付けられるように痛み、私は反射的に穴戸君のデスクに目を向ける。彼はそこで電話をかけていたが、一瞬眼鏡の奥から鋭い視線をこちらに向けてきた。

私はばつが悪くて目を逸らす。

今のは気のせいですか？ 怒ってる？ 穴戸君、君は私に勝手にキスまでしておいて、怒っている？ 確かに私も叩いちゃったし、しかもまだ謝ってないしで、怒られる要素は色々と持ち合わせてはいるのだけれど。

「ああそうだ。一ヶ月ほど先に美容部員に向けての合同カンファレンスが仙台であるだろ。興味があったら、一日出張になるけど一緒に来るか？ 担当地域ちいき以外の美容部員と会えるから、色々参考になる意見も聞けるだろう」

「え、あ、はい」

「じゃあ出張二名で申請出しておくから、予定に入れておいて」

課長はそう言いながら、自分のデスクへと戻っていった。

彼の広い背中を見送りながら、私は冷静でいようと努める。営業職なので出張は多いが、課長と二人で出張なんて初めてだった。情けないことに顔が火照ほってくるのが分かる。気持ちを落ち着かせようとデスクから離れ、今日の営業に持っていくサンプルを取りに倉庫へと向かった。

一人になって、大バカな自分を叱咤しちたしてこよう。

穴戸君に気付かれて忠告までされているのに、まだ私は課長に声をかけられると少女のように顔を赤らめてしまう。もういい加減に気持ちの整理をつけたかった。誰にも言えない、実ることのな

い、やましいだけの恋なんて、痛み以外得るものはない。

備品倉庫に足を踏み入れ、私は段ボールの中から必要なテスターを取り出していく。

頭を仕事モードに切り替えようと意識しているのに、気が付けばまた児島課長の優しい笑顔を思い出す。それとセットで蘇るのは、穴戸君の冷たい視線。

何度目かのため息を吐き出した時、私は背後でドアの開く音を聞いた。

振り向くと、穴戸君だった。

今一番顔を合わせたくない人物の登場に、思わず体が硬直する。

相変わらず前髪で顔が半分隠れて、表情は分からない。彼は「お疲れ様です」と静かに言った。

倉庫でばったり鉢合わせなんて珍しい……っていうか鉢合わせなのだろうか？ そんなに人の出入りのある部屋ではないので、このタイミングでバッタリとなると、どうも追いかけてこられた気がしないでもない。被害妄想？ 自意識過剰？

「児島課長と出張ですか？ 嬉しそうですね」

うん、被害妄想でも自意識過剰でもなかった。どうやら彼は、私に嫌味を言いたくてここまで追いかけてきたようだ。

「別に嬉しそうになんてしてません。仕事だから。穴戸君こそ何？ それが言いたくて倉庫まで追いかけてきたの？」

私は顔が引きつりそうになるのを抑え、淡々と返す。

「そんなに暇人ではないです、と言いたいところですが……この間の一件以来、花園主任が随分僕

を避けているようなので、ちょっと二人で話をしたいと思……」

そう言いながら一歩踏み出した穴戸君に怯み、私は思わず一歩下がる。

また一歩下がると、彼は二歩踏み出してきた。

一歩一歩距離を詰められるごとに、眼鏡で隠されている彼の瞳が視界に入ってくる。

顔、赤くなるな。心臓、静まれ。落ち着け、私！

私は自分を叱咤し、ギュッと唇を噛み締めて立ち止まると、彼にしっかりと向き直る。

きつとこのキス魔は、どんな横暴を通してでも誰かに殴られた経験などないのだろう。それでこれほどまでにお怒りなのだ。二人きりのいい機会だから、今さっさと謝罪してしまおう。

「あの、穴戸君」

私はクールな主任の仮面をしつかりとかぶり直し、出来るだけ冷静に話しかけた。

「はい」

「ごめんなさい……叩いちゃったこと」

「痛かったですね。思いつき叩かれたので」

「暴力を振るったのは……悪かったと思ってるの」

眼鏡の向こうに綺麗な瞳があるのを知っている私は、いけないと思いつつも、彼の瞳を探してしまふ。私の視線を遮るように、穴戸君の指先が眼鏡を少し持ち上げた。

顔の角度が変わったその一瞬だけ、彼と直接視線が交わる。やっぱり綺麗な目だ。

そう感じた瞬間、もう彼の顔と相対する余裕などなくなっていた。私は何も言えずに目を伏せる。

彼の唇の感触を思い出す。ふわりと柔らかくて、陽射しを集めたような温かさ。

無意識に唇を動かしてしまっている自分に気付き、慌てて歯でそれを押さえ込んだ。

見られていませんようにとこっそり穴戸君を窺うと、また眼鏡の奥の大きな瞳と視線が交わった。

「キスは秘密の代償です。児島課長との関係は誰にも言いませんよ」

「だから！ 児島課長とは本当に何もなくなつて……ただ私が想つてるだけだから……」

「……そうですか」

穴戸君はそれ以上何も言わない。

言うべきことを言い終えた私は、その沈黙に耐えられず逃れるように部屋を出ようとした。

ドアノブに手をかけた時、金属製のドアがガチャンと激しく音を立てて、私の目の前で揺れる。

反射的に振り向こうとすると、穴戸君がドアに手をつけていた。私は中途半端に後ろを振り向きかけたまま、ドアと穴戸君の胸の間で、呆然と体を小さくする。

これが噂の壁ドンか。いや、この場合ドアドン？ ドアガチャン？

いやいや、そんなことどうだっていい。今現在重要なのは、迫ってくる穴戸君の顔をどうやって避けるかだ。

ああ、でも……こうやって近くで見るとやっぱりよく分かる。眼鏡の奥に隠されている綺麗な瞳。形のいい薄い唇。この唇が見た目以上に柔らかで優しいことを私はもう知つていて……

「想つてる」——そうやってポロポロと本音を言ってしまうところがムカつくんです」

「あ……」

「……ムカついて……我慢できなくなる」

穴戸君の低い声が耳のすぐ近くで響いた。唇が耳朶に触れそうなほど近い。彼の息遣いまではつきりと聞き取れる。

我慢できなくなるってどういうこと？ 何をする気なの？

言いようのない息苦しさを感じながら、彼の唇を意識してしまう自分がいた。私の心臓の音は、最大限に高まっている。

大きく吐き出された穴戸君の息が私のこめかみを撫でる。続いて、押し殺した声が私の鼓膜を揺らした。

「……メシ、奢つて下さい」

「え？」

「殴ったことを詫びるなら奢つて下さい」

「……」

穴戸君は私から体を離すと口角を持ち上げ、どこか切なげに笑った。

あまりに拍子抜けな要求に腰が抜けそうになった私は、ドアに体を預けながら啞然と彼を見返す。キスされると思った。そして私、また……抵抗できなかった？

そんな自分が情けない。それでも彼の眼鏡の奥にあるミステリアスな瞳について魅入ってしまう。高く鳴り続ける自分の鼓動を聞きながら、私は懸命にそれを否定しようとする。

ドキドキなんてしてない。きっと彼は私をからかっているだけ……そんな男にドキドキなんて……

私が唇を噛みしめっていると、穴戸君はさらに追い討ちをかけてきた。

「今晚、花園主任が彼氏と行くようなお洒落なレストランにでも連れて行って下さい。七時半、角のコンビ二前でいいですか？」

いつの間にか食事に行くことが決定してしまったらしい。

「……穴戸君は、そうやって何でも自分の思い通りにしながら生きてきたの？」

「思い通りになったことなんて、何一つありませんよ。……ただ思い通りにすることを諦めるつもりもないので努力はします。少々ずるい方法であつても」

彼は不思議な笑みと共に意味深なことを言う。その顔が仕掛けた罠の出来に満足しているハンターのようにも見えた。

ここで彼に従うのは、罠に飛び込んでいくようなものなのかもしれない。でも今の私にノーと言える権限はなかった。あまりに大きな弱みを握られてしまっている。

私は覚悟を決めると、気弱になりそうな自分を叱咤して、また余裕のある「クールなビジネスウーマン」になってみせる。

「じゃあ角のコンビ二前に七時半。美味しそうなレストラン、調べておくね」

精一杯の威厳を背中に漂わせ、私は今度こそ備品倉庫から退出した。

九月二十六日。今日は私の二十八回目の誕生日。

誰かにお祝いしてもらおうなんて思っていなかったけれど、こんな風に穴戸君と食事に行くことになるなんて。

平静を装いオフィスに戻る私は、運命の夜が訪れようとしていることにまだ気が付いていなかった。

七時半、時間ぴったりに待ち合わせ場所に到着すると、穴戸君は既にそこで待っていた。会社帰りなので、私はソーションらしい上品さを意識したOレスタイル、穴戸君は残念ながらいつもの大きすぎるスーツ姿である。

「お疲れ様です」と同僚らしく挨拶を交わし、私は彼の先に立つて歩き始めた。

向かっているイタリアンレストランは私のお気に入り。同席者が誰であれ、誕生日くらいは美味しく食事がしたい。

やがて会社からほど近いレストランに到着する。予約を入れてあつたおかげで、すぐに席に通された。

やってきたウェイターにドリンクのオーダーを訊ねられ、私はワインリストに目を通す。まずはある程度アルコールを入れて、雰囲気を楽しませようという目論見だ。

「ワインを飲むなら、ボトルにしましょうか。僕も飲みたいので」

穴戸君にそう声をかけられ、私はさらにリストを睨む。が、いくら見ても何が一番いい選択なのか判断ができなかった。いつもならグラスで好きなものを選ぶけど、このおぼっちゃんが満足するものと考えると迷う。

私はいつそ任せてしまおうと、彼にリストを差し出す。

「花園主任に特にこだわりのないようなら、リストの中に僕の好きなイタリアワインがあるのでそれをおすすめします。トレツビアーノ種の白ワインで、クセが少なく飲みやすい。ピザやパスタにも合います」

ワインリストを見ながら静かに言う彼は、どこか品さえ感じられた。居酒屋で牛すじ煮込みをオーダーしていた彼も穴戸君なら、的確なワインをさらりと選ぶのも穴戸君なのだ。二人でいればいるほど、*ダサイ部下*、という彼のイメージが崩れていく。

「ワイン好きなんだね」

ワインに続いて料理もオーダーし終えた私は、まだ何もないテーブルの上に訪れた沈黙を埋めようとい何気なくそう言った。

「ワインも好きですが……今はもつと興味のあることがあります。時々興味以上の感情を感じることもありますが」

しばらく黙ったあと、穴戸君は一人呟くように答える。

彼の前髪の間から眼鏡が覗いていた。

ふとその眼鏡が、何かを守る兜のように見えた。私がベーシックで清潔感のあるスーツを、営業二課主任としての鎧にしているように。

そんなことを考えているうちに、私はいつの間にか彼の眼鏡から視線を逸らせなくなっていた。そのうち彼が少し首の角度を変えた瞬間に、それまで光を反射していた眼鏡がクリアになり、大きな瞳と目が合う。

私は慌てて視線を逸らした。好きじゃないと言っておいて、こんなに見つめるなんてバカみたいだ。私は、恥ずかしさを隠すように別の話題を切り出す。機会があつたら、いつか穴戸君の耳に入れておきたかった話だ。

「穴戸君、あの……昨日、美容部員との打ち合わせで百貨店回りをしていただけ……久々に前担当していたドラッグストアの店長さんを見かけたから、ご挨拶をしたの。そうしたらね……」

話し始めたところでウェイターがやってきて、ワインを注いでいく。

素敵なレストランで向かい合う男女。その間にはワインで満たされた一組の美しいワイングラス。このシチュエーションで、それを触れ合わずにいられる者はどれだけいるだろうか？

私も思わずグラスを取り、「お疲れ様」と告げて穴戸君の方にそれを傾けた。

彼のグラスが近付いてきて小さく触れると、それは風鈴のような音色を奏でる。長く響く心地よい音は、張り詰めていた私の神経を解してくるようだった。

その音が店のざわめきに溶けて消えるのを最後まで聞いていた私は、「いい音したね」と穴戸君に笑顔を向けた。すると彼もふつと白い歯を見せながら笑う。

その笑顔は真っ直ぐで、いつものような皮肉っぽさがなくて……うっかり見惚れそうになり、私はグイとワインを飲んでそれを誤魔化した。

「それで？」

穴戸君は私のグラスにワインを注ぎ足しながら問う。

「え？」

「ドラッグストアの店長に会ったっていう話の続きです」

「あっそうそう。顔見知りの店長さんだったからご挨拶したんだけどね、彼、穴戸君のこと、すごく褒めてたよ。穴戸君にドライシャンプーやらボディローションやらの店頭陳列を提案してもらってよかったって。あそこ、病院に行く時の通り道だから、お見舞いに行く人達にそういう需要があるんだね」

「ああ……病院から離れてるんで気が付きにくいんです。病院はホテルと同じで乾燥するので、本格的な秋冬商戦になったらあの店はもう少し伸びると思います。次回営業で訪ねる時は、マッサージオイルなんかも提案するつもりです。寝たきりの患者さんに需要が見込めるので」

その時ウェ이터がピザを運んできて、ピザカッターで切り分けてくれる。

私がお気に入りの、半熟卵の載ったピザ・ビスマルク。刃が勢いよく生地を滑ると、黄身がとりりとチーズの上に流れた。

「……穴戸君はよく見てるね。あのお店が病院までの通り道にあるなんて、私が担当していた時には気が付かなかった……やっぱり穴戸君は営業の才能があるよね」

お世辞でもなんでもない。今の彼の話を聞いて、本当にそう思ったのだ。もしかしたら、もう酔いが回ってきているのかもしれない。でも、今は素直に彼の仕事を認めたい気分だった。

ピザを切り分け終えたウェ이터が下がり、私は蕩けるチーズとその上で光る黄身を眺める。異なる黄色の輝きがそれぞれ溶ける純金のように美しく、とっても美味しそうだ。

ふっと視線を感じて顔を上げると、前髪の間からこちらを凝視している大きな瞳に出会った。彼

が見ているのは麗しのピザではない。紛れもなく私だ。

慌てて視線を逸らしたけれど……食べたくてウズウズしている卑しい表情を見られてしまった。

その証拠に、穴戸君は切り分けられたピザを手で示し、微笑と共に「どうぞ」と促してくる。

「……ではお先にいただきます」

私は一言断ると、チーズが糸を引くピザを遠慮なく取り分け、手掴みで素早く口に運んだ。

「あ、あっふい」

口腔にへばりつくチーズの熱さにハフハフしていると、流れる黄身が口から垂れ落ちそうになっ

て、私は慌ててそれを舐め取る。

熱いけど美味しい！ 美味しいけど熱い！

至福の時間を楽しんでいると、また彼の視線を感じた。

「穴戸君食べないの？ 熱いけど美味しいよ。猫舌とか？」

「いただきますよ。とても食欲をそえられる光景です」

いつものように淡々と話す穴戸君だったが、口元に薄らと浮かぶ笑みは、どこか危険な香りがある。

どきりとしたけれど、きつとお腹が空いているのだと自分に言い聞かせ、ピザを彼のお皿に取り分けてあげた。

穴戸君の選んでくれたワインは飲みやすくて、気が付くとグラスの中のそれは随分減っていた。お酒には弱くないけれど、頭が少しふわふわしてきた気がする。

「……穴戸君って謎だね」

「……そうですか？」

酔いが私を饒舌にし、心に繋ぎ止めてあった言葉まで口から出ていってしまう。

「私、穴戸君のこと見くびってたと思う……児島課長のことなんて……絶対誰にも気が付かないと思っていたのに。ううん、気付かれないように、彼氏が欠かさずいるみたいな嘘ついてたのに……穴戸君のその度の人ってない眼鏡は、何か特別なものでも見えるの？」

ピザを咀嚼していた穴戸君の口の動きが一瞬止まった。けれどすぐに落ち着いた様子でワイングラスを手に取り、グイッと薄金の液体を飲み干す。大きく張り出した喉仏が上下に動いた。

「特別なものなんて見えませんよ」

ワイングラスから口を離れた穴戸君は静かにそう言い、眼鏡の奥から挑戦的に私を見据える。否定しなかった。やっぱり彼の眼鏡は伊達だったのだ。

この間、彼が眼鏡をダッシュボードの上に放り投げた時、私はそのレンズの内側から見える歪みのない光景に目を留めた。以来この眼鏡には度が入っていないのではないかと気になっていたのだ。なぜ？ ストレートに訊ねたいが、穴戸君のことだ。どうせ素直に答えてなんてくれないだろう。

「……僕には特別なものなんて見えません。ただ、仕事上でもよく感じますが、人間の視線というのは雄弁です。エンドユーザーの視線の先にあるのは自身の欲求を満たすもの……。花園主任、あなたも同じです。どんなに綺麗に装って上品ぶったところで、その視線は飾れない」

その言葉に、私は胸を突かれた。

穴戸君はそれを知ってか知らずか、メニューを一瞥して「追加していいですか？」と了承を求めてくる。私は頷きながらも、今の言葉を胸の中で反芻していた。

他の人には気付かれていないだろうが、洞察力のある穴戸君にはきつと丸見えだったのだろう。

「目は口ほどにものを言う」。その言葉の通り、穴戸君から見れば、私はクールなモテる女のフリをしながら、『児島課長が好き』と喚き立てていたのと同じなのだ。今まで半ば癖のように児島課長の結婚指輪を見ていた自分が恥ずかしかった。

恥ずかしくて、惨めで、情けなくて、顔が上げられない。

「アルフレッドでいいですか？ 生クリーム系のパスタです」

がっくりと肩を落とす私にも構わず、穴戸君はオーダーを決めてウェイターに注文を通す。

それからテーブルの上にある彼の長い指がコンコンコンと三回落ち着きなくタップしたかと思うと、穏やかな声が私に話しかけてきた。

「花園主任、こっちを向いて下さい。僕があなたの視線を追うのは苛めるネタを探すためじゃない。ただ……興味があつたから」

「……興味が？ 人間観察的な？」

「……観察だけで済むかどうかは分かりませんが」

顔を上げると、眼鏡の奥からじっと私を見つめる穴戸君の瞳と出会った。何か伝えようとしているのか、彼はそのまま私から視線を外そうとしない。

……そういえば、さつきも興味があるものがどうか話していなかったっけ？

私は急に頬が火照^{ほて}ってくるのを感じて、慌ててそれを誤魔化そうと残りのワインを飲み干す。ちょうどウェイターが大皿に載ったパスタを運んできたので、二皿に取り分け一つを彼に手渡した。

「……冷めないうちに食べよっか」

穴戸君、さっきからこつちを見すぎだ。ずっと私から視線を逸^そらせてくれない。

目は口ほどにものを言うそうだけど、私には彼のような洞察力はないので、彼が何を語ろうとしているのか全然分らない。

私は若干食べにくさを感じたものの、生クリームのためぐりと絡まったパスタをフォークに絡め口に運んだ。口から零^{こぼ}れた一筋をチュルツと小さく啜^{すす}ると、ソースが唇に撥^はねる。

「リップグロス……」

「え？」

穴戸君の呟^{つぶや}きに、私は再びパスタを絡め取ろうとしていた手を止めた。生クリームでつやつやと光るパスタは、フォークから滑り落ちて扱いにくい。

「美味^{うま}そうなりップグロスみたいだって言っただけですよ。花園主任」

「え……」

軽く口端を上げる彼の言葉が、ソースに濡れた私の唇のことを指していると気付いて、慌ててナプキンで口元を拭^{ぬぐ}う。

耳が熱い。たぶん私、顔が真っ赤だ。それをアルコールのせいにしたくて、私は穴戸君が注いで

くれたばかりの冷たいワインをまた喉に流し込んだ。

一方、彼はと言えば、こんな恥ずかしいことを発言しておいて、悠々^{ゆうゆう}とパスタを口に運び続けている。さっきから私ばかり慌てているようで悔しい。伊達^{だて}眼鏡のことみたいして気にしていないみたいだし。

少しは反撃してやりたくて、私は背筋を伸ばし呼吸を整えると、彼としっかり向き合った。

回ってきたアルコールが、私を強くしてくれている。

「穴戸君……何で私にキスしたの？ 興味あるって言ったけど、私に 興味があるってこと？」

いつもの悪い癖^{くせ}で、突然足を組んだりなんかしてクールな女を装^{よそお}う私。こうでもしないとこの男とは対峙^{たいじ}できない。

穴戸君は口の中にあるパスタをゆつくりと時間をかけて咀嚼^{そしゃく}したあと、ワインを一口飲んで私の質問に答えた。

「あなたにとっても興味があります」

思ってもいなかった強さで明言されて、私は心臓を一突きされたような感覚に陥^{おぼ}つた。

思わず組んでいた足を解いて、両足で床を踏みしめる。

「とても興味があるから手に入れてみたい。手に入れて、自分が想像していたものと同じか、確認したい」

「かく、にん？」

穴戸君はワインに濡れた唇で妖^{あや}しく微笑んだ。その唇がまるで南国の果物みたいだなんて思いな

がら、私はまたキスの感触を思い出していた。

やがて形のいい唇が小さく開いて、そこから白い歯が覗く。一瞬見えた彼の犬歯に、本能的に危険を察知しながらも、私はそこから目が離せなかった。

「もう一度、キスをしませんか？」

「……」

穴戸君は何を言っているのだろう？ そう思いつつも私の心臓はうるさいほどに鳴り続ける。

「花園主任、申し訳ありませんが我慢の限界です。分かりやすく言ってあげますよ。俺はあなたが欲しい」

警鐘のような自分の鼓動を聞きながら、私は不思議な眩暈を覚えていた。

自分でもどうしたいのか分からない。無言で立ち上がって一人でここを出ていこうか、それとも上司らしくお説教でもしてやろうか。

いっそ、あのキスをもう一度、唇に受け止めてしまおうか……

ワインに酔って思考が停止しているわけではなかった。

ただ本能的に、この誘いがとても大事なものであるような気がしていた。

——本当に新しい出会いで新しい自分に……

もしかして、これが自分を変えるきっかけになるのではないか。穴戸君は私の弱点を知っている。その上でこうして迫っている。そんな強引な彼なら、今までの私を吹き飛ばしてくれるんじゃないか。そう思った時、私の唇は既に動いていた。

「……眼鏡、取ってよ。口説く時ぐらい……余計なモノ取って」

喘ぐように言った私の言葉に、穴戸君は素直に従う。

その瞬間、私は後悔した。

ああ、彼が素直な時は警戒すべきだった。

長い指が前髪を少しだけかき上げ、危険すぎる瞳を晒す。

挑戦的な笑みを浮かべて私を捕らえようとする瞳から、もう逃げることなどできはしない。



タクシーに乗ってしまった……

そう、穴戸君と一緒に彼のマンションに向かうため、タクシーに乗ってしまったのだ。自分で決めたにもかかわらず、足も心臓も脳みそもガタガタと震えているようだった。

後部座席で穴戸君と隣り合って座りながら、私は必死に落ち着こうと自分を分析してみる。

二十八歳。一つ年齢を重ねた今日、自分を変えたかったことは間違いない。

これまで何度も行き場のない片想いなど止めてしまおうと思いつながらも、児島課長の結婚指輪を恨めしげに追いかける癖から抜け出せずにいた。そんな不毛なことを繰り返す自分が大嫌いになる前に、なんとかしたかった。

この片想いにさえ終止符を打ってしまえば、まだ知らない新しい自分になれるかもしれない。

穴戸君は強引な男だけれど、今の私が必要としているのはその強引さなのだろう。それに……穴戸君が私の秘密を掴んでしまったように、私もまた、彼の隠されている部分をもっと知りたいと感じていた。二度の強引なキスの感触は、なぜかいつまで経っても私の唇の上に留まっている。その理由を知りたい……

タクシーが穴戸君のマンションの前で停車する。同時に、私の心臓も飛び跳ねた。

キスはできても、それ以外は未経験……いや、いい歳なので男と女がどういうことをするのかは分かっている。だけど自分が実際にあんなことやこんなことをするのはだと改めて想像すれば、それだけで体中の血が沸騰しそうになる。

でも、私ももう二十八歳だ。ここで引き下がるわけにはいかない。

穴戸君が求めるならば、私は成熟した一人の女性としてお相手しよう。そしてこっそり処女を捨て、児島課長への恋も忘れ……そうすればすっきりとした気持ちで新しい恋もできるかもしれない。今の私に必要なのは気持ちをリセットしてくれる強引な力なのだ。

私は自分に強くそう言い聞かせ、穴戸君に続いてタクシーから降りる。そして一緒にマンションのエントランスをくぐった。

緊張で思考まで強張^{こわば}っていたけれど、このマンションがかなり高所得者層に向けて作られているのはすぐに分かった。エントランスにはオブジェのようなソファが置かれ、壁には巨大なモダンアートが飾られている。

穴戸君は無言でエレベーターに乗り込むと、最上階のボタンを押した。着いた階の長い廊下の先

には大きな玄関扉があり、そのロックを外して私達は部屋の中へと進む。

ガチャンと音を立てて扉が閉まった瞬間、私はいつかのように壁と穴戸君の間に挟まれていた。

彼の右手は私の手首を掴み、左手は私の肩を壁に縫い止めている。

「ここに來たってことは、こういうことですよ」

長い前髪の間から、熱を秘めた瞳が私を捉えていた。私を貫かんばかりの鋭い視線なのに、眼鏡を外した穴戸君の瞳はやっぱ綺麗だ。睫^{まつげ}が長く、黒目は海のような深さを湛^{たた}え、まるで吸い込まれそう。

思わず瞳を閉じると同時に、唇に温かさを感じた。

薄く、柔らかく、ほんの少し湿った唇。

ドアに押し付けていた彼の左手が、いつの間にか私を優しく抱いていた。

「まだ靴は脱いでいない。ここで止めるなら追いかけてません」

私の頬に自分の頬を当てて、彼は呟^{つぶや}く。耳にかかる吐息が熱い。

「……いい歳した大人の女を部屋に誘っておいて、穴戸君は尻込みするの？」

私は限界まで背伸びをして穴戸君を誘う。それでも心臓は皮膚を持ち上げんばかりに高鳴っていた。

ここで突き放されたら、私はますます自分を情けなく思うことだろう。ここまで来た以上もう最後までいってしまおうしかなかった。

声が震えているのがどうぞ気付かれませんようにと祈りながら、私は穴戸君を見上げる。

「怯えた目で男を煽るんですか？ ……そういう女性にはそえられる」

穴戸君が小さく笑うのを見ながら、私は足を少し浮かせてパンプスを脱いだ。それを確認した穴戸君の唇がもう一度落ちてくる。

受け止めた瞬間、彼の舌が唇の奥を舐めた。彼は私の唇の形を確かめた後、上下の歯の間を抜けて私の舌を撫で上げる。ぴったりと重ね合わせた唇の奥で、二つの舌がゆるゆると絡まっていた。

口の中が熱い。穴戸君の舌に撫でられた場所が甘く発熱する。

濃く深い大人のキスは、初めてだった。きっとこのキスに私は夢中になる。そんな予感がした。私の背中に回された腕の力が強くなると同時に、舌はさらに深く口内を探ってくる。私の内側を蹂躪し、犯すような荒々しい口づけ。

それなのに気持ちいい。荒い呼吸も、舌の動きも、混ざる唾液も、もうどちらがどちらのものか分からないのに、気持ちよさだけはダイレクトに伝わってくる。穴戸君、たぶん、キス上手だ。

「……顔、真っ赤……」

唇を離れた彼にそう言われ、私はますます顔に血が上るのを感じた。

「大丈夫ですか？ 部屋に上がったら悠長に仕事の話なんてしませんよ。やることやらしてもらいます」

「……私、もう靴脱いだから」

私がそう言うと、彼も自分の靴を脱ぎ、無言で長い廊下を歩いていった。彼の後について室内にお邪魔した私は、思わず息を呑む。

エントランスの雰囲気から察してはいたけれど、かなり大きな部屋。外国のコンドミニウムみたいに開放的な作りだ。その上、物が極端に少ないせいで、余計にスペースが広く感じられる。

テレビやテーブルさえなくて、目に付くのは大きなオーディオセットとその周りに無造作に重ねられたCD、そして黒い革張りのソファアと、よく育ったいくつかの観葉植物だけだった。

「お家……大きいね……もしかして、ここに一人で住んでるの？」

「正しくは兄貴名義の部屋です。兄貴が最近一戸建てに引っ越したんで、一ヶ月ほど前から住まわせてもらっています」

なるほど、常務の部屋だったのか。さすが資産家一家の次男。思わず自分の1LDKの部屋と比べてしまい、羨ましいやら物悲しいやら……現実離れた空間に放り出されたせいで、一瞬自分がここに来た理由を忘れそうになった。

半強制的にそれを思い出させたのは、後ろから伸びてきた彼の指だ。

長い指は私の髪の間を潜っていくと、ヘアクリップをパチンと外してしまう。

一つに纏めていた髪が落ち、穴戸君は肩に流れたそれに唇を寄せた。

「花園主任の髪、好きです。セックスする時は下ろしておいて下さい」

「セックス」という生々しい言葉と命令とも取れる挑発的な口調に、私の頭にカッと血が上る。私はヘアクリップを奪い返し、逃れるように彼の手を払いのけた。

にもかかわらず、穴戸君はすぐに後ろから私を抱き寄せる。そのまま髪を撫で上げ、露になった耳殻を舌でなぞった。耳の付け根を舌の先でくすぐられて、体のどこかが小さく疼く。